

150年以上前に描かれた 筑後川の治水計画 地元・北野町で初公開

筑後川は、長さが約143キロメートルで、九州で一番長い川です。流域面積も九州で一番大きく、多くの人々が筑後川の水を使って暮らしています。昔から洪水や水害が多く、2年に1度は堤防が決壊すると言われました。1573～1876年の294年間には、166回の水害が発生しました。こうしたことから、筑後川は関東の利根川、四国の吉野川とともに、日本三大暴れ川に数えられています。

筑後川の治水は、江戸時代初め頃から、領主の主導で大規模事業が行われるようになりまし。江戸時代後期になると、水害に悩まされてきた地域から、増水した筑後川の水を流すための新川（新しい水路）をつくる構想が持ち上がります。明治時代にかけて、複数の新川計画が作られたことは知られていましたが、計画書そのものはこれまでほとんど確認されていませんでした。令和6年3月、その計画書の一つである絵図が本市に寄贈されました。今から150年以上前に作成され、北野町の旧家に伝わってきたものです（2ページ参照）。これを受けて、5月19日（日）、コスモすまいる北野を会場に「新収蔵資料〈筑後川水吐新川見積絵図初公開〉を開催しました。

この初公開展示は、貴重な絵図が残されてきたことをいち早く地元の方々を知ってもらいたい、そして洪水の多い梅雨時期を前に筑後川の水害と治水の歴史を振り返ってもらえれば、との思いから企画したものです。また、久留米市流域治水推進プロジェクトとも連携して、田んぼダムや雨水貯留施設の周知も図りました。

開催の前には、西日本新聞（5月11日）や読売新聞（5月18日）に紹介され、当日には、朝からKBC九州朝日放送の取材カメラが入り、夕方のニュース番組で放送されました。来場者の総数は215名でした。



計画のままに終わった「筑後川水吐新川見積絵図」ですが、新川開削計画地と工事にかかる人員や金額が具体的に記されています。

「新川の幅や深さは？」

「工事費をいまのお金に換算すると？」

「いま同規模の工事をするとしたら？」

「完成していたら、自宅のすぐ近くに新川が流れていたかも…」

「どのくらいの治水効果だろうか」

それぞれに絵図を読み解いていく来場者から、さまざまな意見や質問が寄せられました。なかでも「もし計画が実行されていたら」という点に、多くの関心が集まっていたように思います。

終盤には、おそらくこの時たまたま居合わせた来場者同士が、絵図を囲んで互いの記憶や知識、経験を語り、意見を交換する、座談会のような時間が訪れました。

流域に暮らしてきた方は、先祖代々語り継がれてきた筑後川の歴史を。また、上流・下流それぞれの地点から見てきた筑後川の景観とその移り変わりを。今まさに治水事業に携わっている方は、治水の考え方について現在との比較を。公開時間の終了を迎えるまで、話は尽きませんでした。

来場の皆様には、絵図を捉える多様な視点、歴史資料だけでは知り得ない筑後川の歴史など多くの示唆を受け、企画者として望外の喜びです。

【編集後記】

令和6年度も、市民の皆様より、多くの資料が寄贈されました。資料を整理していると、100～200年前のものが残っていることに感慨深くなります。久留米市内には、まだ古いものが多いという眠っているのではないだろうかと考えます。

ご自宅などの整理で出てきたもので、今後の保管について迷った際は、一度、文化財保護課までご相談ください。相談の流れは、左記QRコードからご確認くださいませ。



『収蔵館ニュース』第21号

発行年月日 令和7年3月31日

編集・発行 久留米市 市民文化部 文化財保護課
久留米文化財収蔵館
〒830-0037
福岡県久留米市諏訪野町 1830-6
電話・FAX 0942-38-6194
E-mail bunkazai@city.kurume.lg.jp

「収蔵館ニュース」前号（第20号）はこちらからご覧いただけます。

久留米市ホームページ ➡ <https://www.city.kurume.fukuoka.jp> > 観光魅力・イベント > 文化財・歴史 > 刊行物の案内 > 【配布物】収蔵館ニュース